むずかしいことはいわない
からだを動かすことが好きな
そんな子に育てたい

はだしで土をふみ
全身に太陽をあび
自然とひとつになって
走りまわり、ころげまわり
汗びっしょりになる

そんな子に育てたい。

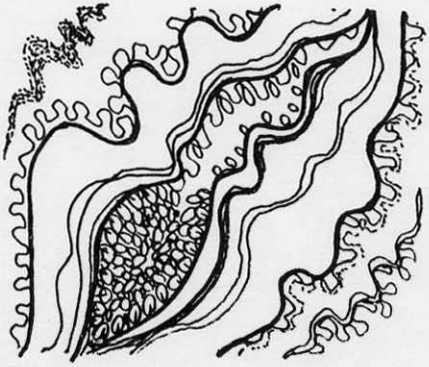
昭和52年９月１日／編集・発行／岡崎市教育委員会

（緑陰に学ぶ ― 井田小）

―教育随想―

古文書断想

新行紀一



八月一日、滝山寺にて、鎌倉時代の古文書をみせていただいた。嘉禄二年（一二二六）のものである。これまで知られていた市内最古のものが永仁四年（一二九六）であるから、七〇年も古いものである。

というと、いかにも新発見のように聞えるが、実はそうではない。すでに『岡崎市史』第八巻で、滝山寺の宝物の一つにあげられているから、五〇年以上も前に柴田顕正氏が見ておられるものである。もっとも滝町は当時は市外であったため、市史本文には一切とり上げられていない。それ故あまり注目されることもなく、学界にも紹介されなかったらしい。お寺でもそのような古いものとは知らなかったといわれる。

◇　◇

文書の内容は今後の研究にまつべき部分が多いが、惣持禅院に阿知和の田一反半を、年中行事の費用をまかなうために寄進するというもので、坂上と左衛門少尉高階という署判がある。おそらく二人は時の三河守護足利義氏の家臣で、土地寄進の主体は義氏であろう。惣持禅院は源頼朝の菩提を弔うため、頼朝の従兄弟にあたる滝山寺住持寛伝が、正治元年（一一九九）に建立したもので、のち総持尼寺に発展したと考えられる。

足利義氏は寛伝の姉妹の子か孫にあたる。この所縁から、承久の乱後に三河守護、額田郡地頭となった義氏が、寄進を行ったと推定してよいであろう。義氏は滝山寺にも土地や材木を多く寄進したと伝えられている。左衛門少尉高階は、永仁四年の総持尼寺文書で、比志賀郷（額田町桜形付近）を娘に譲ったことが知られる高師重（心仏）の祖先ではなかろうか。なお三河守護、額田郡地頭職は、義氏―泰氏―頼氏―家時―貞氏―尊氏と伝えられた。

◇　◇

柴田顕正氏による市史全十一巻は、大正末―昭和初年のものとしては出色の地方史の一つといえよう。もちろん、現在の目でみれば不備なところは多いが、これは学問の進展の結果でもある。

しかし柴田顕正の名は不朽でも、負の遺産も大きいものがある。市史完成後は市域の歴史を研究する者がほとんどなく、地方史研究の伝統は消滅したも同然の時期があったらしい。市域の歴史に対する関心が高まったのは、ようやくここ一〇年来の事でしかない。後継者は育てられなかったのか、育たなかったのか。

かつての師範、学大や教育現場には、教材研究で人の著作を抜き書きしまとめる程度以上には、歴史の研究など必要がないという風潮でもあったのだろうか。

◇　◇

七五〇年前の古文書の長い眠りは、はしなくも岡崎の近現代史の一断面を教えてくれる。『新編岡崎市史』編さんに関係する者の一人として、充分心していかねばならないことである。

（愛教大教授）

ニジマス

本田久勝

一学期の終わりに、恒例の個別懇談会が行われた。その席上、母親から、

「うちの子は中学生三年にもなって、魚釣りばっかりやっていて困ります。勉強に身を入れるように、先生の方から言っていただけないでしょうか。」

「漫画ばかり見ていて困ります。」

「テレビにつきっきりで……」

こんなことばが多く聞かれた。

さっそく次の日

「君たちにはこの夏休みが一番大切だ。今、勉強しなきゃいつやるんだ。自分の希望校へ入れやしないぞ、悔いが残らないよう、力一杯やれ！いいな。」

「はーい」と、素直にうなづく。かわいい生徒たちである。これで彼らは今夜から勉強に打ち込むであろうと満足して帰宅する。

くつろぐ間もなく生徒が尋ねてきた。

「先生、たくさん釣れたので魚を持ってきてあげた。」

目の下二十センチ近くもあるニジマスで

少年自然の家付近の山林には、減少したとはいえ、まだ、かなりの数の野生動物が生息しています。河合中学校の情報網がキャッチした野生動物たちの生活の情況を紹介しましょう。数字は河合学区で、昭和四十一年以後生息を確認されたものです。この中には季節的に移動するものも含まれています。

◇

・ニホンジカ　四十三年、切越町で確認され、記録では、のべ数十六頭。当地域に定住しているのではなく、秋、本宮山から移動してくるようです。

・イノシシ　切越町から古部町にかけての山林に通路があり、イネなどに大きな被害を出しています。四十六年須渕町の水田に子連れが現れて、うち二頭が捕獲され、飼育された記録があります。また、切越町でも、四十三年から三年間飼育されていた記録が残っています。

・ニホンザル　切越町から古部町にかけての山林で確認されていますが、集団ではなく、一匹のようです。

・キツネ　最も生息の変化がはげしい動物です。四十六年ごろまでは見られなかったのですが、ここ二～三年間、数が多くなっています。山間部の開発により移動したものと思われます。河合中学校に連絡のあったものだけで八頭あり、そのうち一頭は標本にしてあります。どうしたことか、八頭がすべて雄であったことも不思議です。

・タヌキ　河合の里には多く見られる野生動物のひとつで、記録としては十三匹、現在河合中学校にある標本は、四十八年の秋、須渕町の道路で自動車にはねられたものです。これがまた、キツネと同様、オスでした。

・イタチ　生平町を中心に、学区全域に生息する動物です。農薬の毒性低下と休耕田の増加により、数を増していますが、イタチとは逆に、四十五年ごろから数が少なくなっており、捕獲の記録がありません。

・ムササビ　シイやカシの古木のある所が生活場所です。夜行性で、四肢の間にある膜を使って滑空する姿はみごとです。

・リス　蓬生町から古部町にかけての、シイ・カシの多い林で見られ、数を増しているようです。情報網にかかったのべ数は四十三匹。昼間の活動も活発です。

・アナグマ　タヌキ同様、土中に穴をあけて生活します。「マミタ」とも呼ばれ、愛嬌のある動物です。

・ヤマウサギ　ここ数年、数を増してきた小動物です。愛らしい姿に似ず、たいそうないたずらもので、スギ・ヒノキの植林地に大きな被害を与えている問題児というところです。生活場所を狭められたお返しのような気もしますが、いずれにしても、食料と住所とが、彼らの当面の問題のようです。

その他、河合の里に生息する小動物として、モグラ・ノネズミ・カワネズミなどが確認されています。

◇

河合地区は、市内で自然環境の最もよく残された地区の一つですが、それでも近年の道路整備に伴う交通量の増加、ゴルフ場の建設などの環境変化が、野生動物たちの生活に大きな影響を与えており、その結果が彼らの生息・分布状況の変化として現われていると思われます。

何にしても、森の住人たちの当面している難問は、食料問題と住宅問題であるようです。（河合中　古田忠久）

あった。

開けば授業後、友だち数人でマス釣りに行ったとのこと。

晩酌の肴はマスの塩焼きとなったが、やけに小骨がのどにからむ魚であった。

（福岡中）

朝の電話

栗田員余

リーン　リーン

朝、七時前、こんなに早く何だろうと思って受話器を取る。

「先生、ぼくNだけどねえ、学級放送の原稿とボールペン原稿しりませんか。」

「何言ってるの、今ごろどうするつもり。録音してきょうのお昼の放送だよ。」

「ハイ……。あと少しだから、今から書いてしまおうと思って……。」

「思ってどうしたの。」

声はだんだん高くなり、怒りがこみ上げてくる。

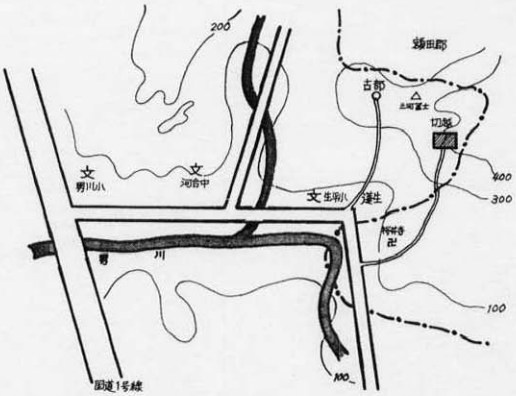
前日、わたしは書きかけのままほってある原紙を見つけ、係りのNの無責任を心でなじりながら、家に持ち帰っていたのだった。

「早く学校へ来たけどないから、先生、知っているかなと思って。」

「何、Nさん、もう学校にいるの？」

「ハイ。」

まだ起きたばかりのわたし、もう学校にいるN。そんなことは露知らず、あまりカッカしたので、ちょっと恥ずかしい気持ちで学校へ急いだ。（梅園小）

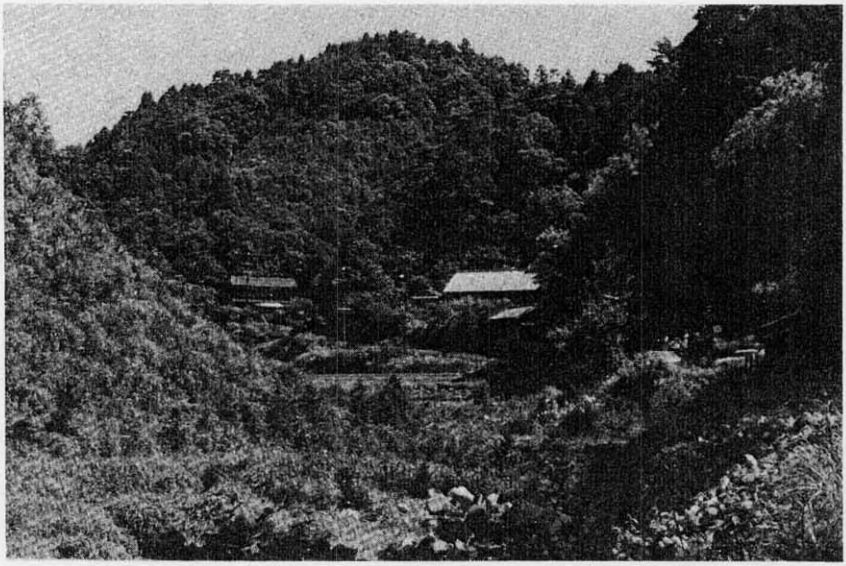


岡崎の秘境

切越をたずねて

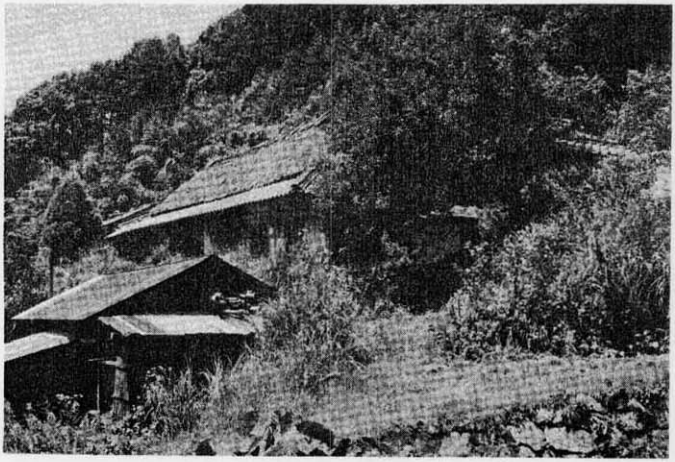
ふるさとを見つめなおそうとして編集し始めた「岡崎再見シリーズ」も今月で四回目。秘境というには、いささか面映ゆいが……。

わたしたち編集委員は、夏休みの一日、社会科の先生方の協力を得て、とにかく、「岡崎の秘境と」呼ばれる地を車を捨て、自分の足で訪ねてみた。



▲山ふところに抱かれ、眠るようにひっそりと息づく民家、全部で三軒。

▼荒れるにまかせた廃屋、よそ者が見れば、もったいないと思う。▶



▲風雪にさらされ村を守りつづけた地蔵

岡崎市の東端、男川の源流、海抜四百米に位置する切越。

市の中心部から十キロメートル内外の距離であるが、山深く人跡まれで落武者が住みついたという伝説もさこそとうなづける。

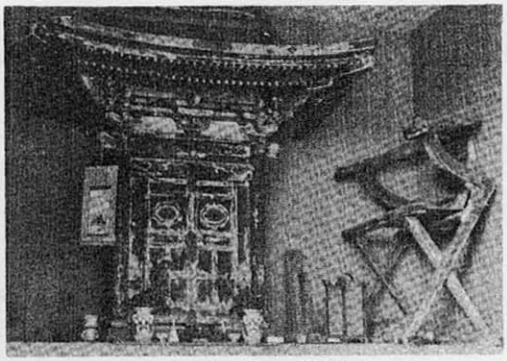
岡崎市史によると「明治九年一月調べ、戸数三十五」とある。それが戦前はすでに十二戸に減り、現在はわずかに三戸を数えるのみである。

山青く水清きこの谷深い里にも、時代の波は及び、人々は次々と村を去ったが、それでも近くの、男川下流べりに住んでいる。先祖伝来の田畑は手離すことができず、車で農作業に通っているという。

切越はいうに及ばず、河合地区もまた、わが岡崎の民俗資料の宝庫である。

▲切越の夫婦ヒノキ。県下最大のものという。

▼落武者が祖先を供養したという八面塔



▲部落で祀る観音堂。かつては極彩色であった。

松籟のもと、よりそうように建つ八面塔 ▼

教育日々

わたしの受け持ちは五年生九人である。小規模校の良い所は教師と子供一人一人の結びつきが密であることだろう。

しかし、高学年になると教師の手を借りずとも子供らでやっていくが、お互いが体裁をつくるようにもなってくる。

そんな彼らの中で、信頼しあえる学級集団をめざし「書く・読む・聞く」を学級経営の柱としている。

「書く」というのは、学級通信の発行である。毎日発行しだして二年目。昨年度は、教師から家庭への一方通行に終わってしまった。やはり親と教師の結びつきがなければだめだと反省し、今年度は親と教師と子供との結びつきを学級通信に求めた。

その手だての一つとして、子供が毎日書いている計画表を利用して、親から子、教師から親や子など三者の対話を続け、それを学級通信を通して全員の輪の中へ紹介したり考え合ったりする。父兄をも含めた学級集団を考えていきたい。

三つのきずな

生平小

野々山宏司

「読む」というのは、子供の日記である。教師の朱書きを楽しみにし、返されるとすぐ読み始める子供たち。弟とけんかしたことや、夕飯のカレーがうまかったことなどの日常生活の出来事など、この頃は本音が書けるようになった。自分の過ちを認めたり、友だちについて語ったり、学級の問題に目を向けている。それらの内容を真剣に読み、わたしも本音をぶつけてやる。

「聞く」というのは、子供の声である。彼らが主体的に、身を乗り出して学習に取り組むのは、教師が子どもの考えに耳を傾けるからであろう。放課も彼らの声の中でと思い、毎日一回、全員で遊ぶ時間を設けている。

「先生、今日はリレーだよ。」と伝える子どもに、

「よし、先生はアンカーだぞ。」

と、裸で運動場に飛び出す。

「先生、あしたはドッチだよ。」

と、笑顔で話す彼らの声がたまらなく好きである。

生活ノート

葵中

中尾静香

今日も生活ノートの山が机の上にバサッと置かれている。さあ後四十五分勝負。まずN男から。「やっとクラブで先輩に認められた。やっぱりいつもまじめにやってきたからだ。」そのとおり！と私は行間に書き込んだ。

四月の始め、生徒達は渡された生活ノートを前に〝なんだ。また宿題が一つふえたか〟という顔をした。書いてある内容は一日の記録が大半であった。先生が読むんだものへたな事書けないよというのが、彼らの偽らざる気持ちであったらしい。それでも行間へあいづちや問いかけを入れた。一日一回、ノートを通してでもいいから話そうと呼びかけてきた。

四月後半になり、クラブ選択の悩みが出てきた頃、少しずつ反応が返ってきた。しめた！と私はさらに朱書きを加えた。「病気で寝たきり、こんな生活がいつまで続くんだろうといつも言っていたのに、とうさんが死んじゃったらかあさんは一ぺんに元気がなくなった。今日も泣いていた。それを見てにいさんは笑っている。ひどい。先生にいさんどうしてこうひどいんだろう。」J子からである。少しずつ自分の考えを書いてくる生徒が多くなった。

生活ノートは私と生徒との語らいの場である。私が生徒を理解し、さらに学級の問題をつかむ貴重な手立てである。生徒が自分の思った事を書きやすいように、文章はなるべく口語調で説教じみないよう気をつけてきた。が生徒が私の意見を希望する場合は遠慮なく書き込んだ。一学期後半には過半数の生徒が何か思いあまると、紙を付け足して書くようになってきた。またなかには写真付きで自分の趣味を書いてくる生徒も出てきた。

しかしK男のように「先生、本当の事を言うとね僕生活ノートの必要性感じてないんだ。」というのもいる。これはこれで結構。現在の生活が順調にいっていればそれにこしたことはないのだから。いつか彼が必要を感じたら書いてくるはずと思いつつ毎日ペンを走らせている。

おしらせ

盛況だった夏期実技講習

一三の教科・領域、七二五名が参加

八月一日から開始された現職教育各部の自主的な運営による夏期実技講習会は、一三の教科・領域に及び、予定人員を上回り延べ七二五名の先生方が懸命に受講された。

企画・運営に当った世話係の方々の努力はもちろんのこと、明日の授業に直結する切実な学習内容が好評を呼んだものと考える。

それぞれの研修教科・領域名日程、講習内容は次のとおり。

▼国語・8/1＝ひらがな・作文・詩・ノート指導（六八名）▼書写・8/2＝小・中学校の毛筆教材実習（四六名）▼社会・8/8・8/10＝「水と社会生活」・「在来工業とその背景」をテーマに市内巡検（七〇名）▼算数・数学・8/1＝数え棒の使い方・数学・ノート指導の実技（四八名）▼理科・8/4～8/6＝石灰岩地形についての現地学習（三三名）音楽・8/1＝歌唱指導・リコーダーアンサンブルの指導の実際（五五名）▼図工・美術・8/1＝基礎技術指導法（八三名）▼家庭(小)・8/1～8/2＝実践的態度を育てる資料づくり（三五名）▼技・家・8/1＝工場見学と実技研修（四二名）▼視聴覚・8/1・8/2＝初級VTR・TVカメラの取り扱い、初級OHPの取り扱いとTP作製（五八名・七二名）▼学校図書館・8/2＝寺津小・西尾中図書館見学（四六名）▼養教・8/1＝「保健だより」の作り方（四六名）

【寄贈刊行物・資料等】

◇村積にひびく子ら

岡崎市立奥殿小学校著

老化現象を起こしているといわれる現代の子等に、子どもらしい気力・活力を呼び起こす二か年の努力が綴られる。A5判一五二頁。

◇愛知教育文化振興会20年誌

愛知教育文化振興会編

夏冬の日誌を初め子どもに親しまれているわが愛知教育文化振興会が、財団法人として発足以来二十年の足跡を胎動、創設・拡充・発展の四期と現状について回顧する。

■郷土読本「岡崎」発行

社会科「地域学習」の資料である「おかざき―小学校用」、「岡崎―中学校用」を七年ぶりに全面改訂した。

改訂の基本は、教科書に準拠し、この副読本を資料として学習を進めていけるように編集することにあった。

・学習の目当て、・観察や資料活用の手法を示し、子供達が一時間ごとの学習を進めやすいように工夫した。

学校によっては、その地域によって、内容の順序を組みかえて学習を進めてもよい。

郷土を正しく理解し、郷土を愛する心の育成に役立つ学習が深まることが期待される。

■井田小学校研究発表会

九月十三日▼主題＝井田小の体力づくり▼正課体育や遊び、保健指導の場面を重視した体力づくり。

第30回岡崎市中学校市長杯総合体育大会　兼西三河中学校選手権大会 岡崎・額田支所予選会成績

52.7.21～8.4

種目	性別	優優	2位	3位
バレーボール	男	幸田	矢作	甲山
	女	幸田	葵	矢作
バスケットボール	男	葵	美川	矢作・城北
	女	甲山	葵	美川・幸田
軟式庭球	男	甲山	東海	南
	女	矢作	南	葵
卓球	男	東海	幸田	南
	女	幸田	東海	矢作
体操競技	男	甲山	葵	竜海
	女	南	矢作	葵
ハンドボール	男	美川	城北	葵・六ツ美
	女	六ツ美	美川	葵・岩津
剣道	男	幸田	城北	六ツ美・岩津
	女	幸田	美川	矢作・附属
水泳競技	男	甲山	竜海	葵
	女	甲山	矢作	葵
陸上競技	男	矢作	葵	岩津
	女	甲山	矢作	東海
柔道	男	美川	竜海	
軟式野球	男	葵	幸田	甲山・六ツ美
ソフトボール	女	甲山	幸田	葵・矢作

〈総合成績〉

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
男子総合	葵	城北	甲山	矢作	東海	竜海
女子総合	矢作	葵	甲山	南	東海	美川
男女総合	葵	矢作	甲山	東海	南	城北

第4回　岡崎市小学校球技大会

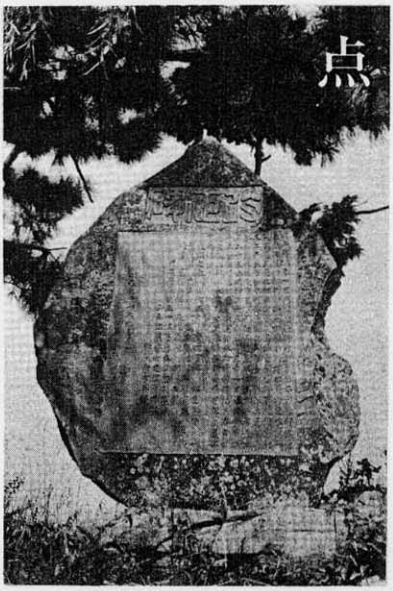
第16回　岡崎市小学校ソフトボール大会

第15回　岡崎市小学校水泳競技大会……成績

岡崎市体育館・岡崎公園・市内小学校　(52.7.21～8.3)

種目	性別	1位	2位	3位
バスケットボール	男	岩津	愛宕	連尺・根石
	女	愛宕	岩津	大樹寺・根石
バレーボール	男	大樹寺	六名	根石・山中
	女	岡崎	大樹寺	六名・広幡
ソフトボール	男	矢作南	六ツ美	岩津・連尺
	女	広幡	連尺	男川・大樹寺
サッカー	男	根石	福岡	広幡
水泳競技	男	井田	根石	附属
	女	井田	根石	梅園

点



所在地　岡崎市洞町西五位原

改正碑

東公園を左手に見て、東へと車を走らせる。この夏拡幅工事が完成したばかりの道の中ほどで車を止め、東南の方向を望むと黄金色に実った稲田が一面に広がる。そのまん中に、古木の生えた一里塚のようなものが見える。近づいて碑文を読んでみるとこの辺り一帯の美田の由来がわかる。

この地は菅生川より一段高く当時は水利がないため荒れた土地であった。そこで村人たちが明治三十二年十二月から足かけ三年にわたり堤を築いて水路を開き荒地を沃土とかえた。その記念碑を建立するにあたり前岡崎藩主本多公より「改正碑」という文字を賜り、碑文は志賀重昂の撰により漢文で記されている。

碑文の礎石に立ち目を閉じると昔の荒涼とした丘と、堤づくりにいそしんだ農民の陽焼けした顔が浮んでくる。

国道を走る車のひびきに我にかえった。

●カット　大樹寺小　松井悦子

オアシス

落鮎。清冽な川の上流で育った鮎は、初秋産卵すると川を下って死ぬという。

落栗。なんとなく幼い頃のふるさとを思い出させる。

落ち穂。ミレーの「落ち穂拾い」が頭に浮かぶ。落ちこぼれ。だれが言い出したか、不快なひびき。こんなことばはなくしたい。

出血大バーゲンなるチラシをよく見る。年がら年中バーゲンセールである。出血セールを年中やっていてもうかるはずがない。主婦たちは「まあ安い！」と感嘆の声をあげる。バーゲンは金がかからないとでも思っている。人がいいのか、広告に弱いのか…。金を出しながらただで買ったと思っているのでは…。

「ありがとう！」の声とともに、フロントガラスの向こうを小さな影がよぎる。ふり返ってニコッと笑った。日焼けした顔に白い歯が光る。（止まってよかった。）

ここは信号のない裏街道、急ぎの車が走る。子ども達はキョロキョロしながら車の切れ目を待っている。こんな毎日が、また始まった。

鈴虫、コオロギなど、秋のおとずれを告げる虫の音が聞かれるようになった。暑かったこの夏も、例年の如くアブラゼミ、クマゼミ、ツクツクボウシと鳴く順がきまっていた。ツクツクボウシの声に、夏の終りの感を深くする。

学校には再び喧噪がもどってきた。これを聞くとかえって落着くから妙。

この本を

○中学生その日々	望月　一宏	
岩波書店		¥ 280
○愛に生きる	鈴木　鎮一	
講談社		¥ 370
○日本を語る	江崎玲於奈・広中平祐	
毎日新聞社		¥ 860
○よこ糸のない日本	オーテス、ケーリー	
サイマル出版会		¥ 1,200
○新年の二つの別れ	池波正太郎	
朝日新聞社		¥ 1,000
○わが文学の軌跡	井上　靖	
中央公論社		¥ 880
○残照に立つ	曽野　綾子	
主婦と生活社		¥ 880
○山本周五郎	尾崎　秀樹	
白川書院		¥ 980
○暮しの中のことわざ	池田弥三郎	
毎日新聞社		¥ 920
○一向一揆の基礎構造	新行　紀一	
吉川弘文館		¥ 2,900